

## —人生を変えた牛との出会い—

今から4年前の中学3年生の夏、初めて見た牛に心を引かれたところから私の人生は大きく変わりました。学校でのつらい出来事により、落ち込んだ私。母に「もう学校に行きたくない」と言ったことを覚えています。そんな私に母が「どっか気分転換に行きたいところはないの?」と聞いてくれたことが全ての始まりでした。

引っ越してきて約1年半、ずっと家から車で20分くらいの場所にある観光牧場に行きたかったことを話し、連れて行ってもらうことになりました。そのときはただ、搾りたての牛乳で作ったアイスを食べたかっただけで、牛が好きだから見に行くというわけではありませんでした。食べることが好きな女子中学生が、自然の中で新鮮な牛乳で作ったアイスを食べたテレビの一シーンのようなことをやってみたかったのです。そんな些細な思いが私をここまで連れてきてくれるなど、そのときは考えもしませんでした。

牧場に着いたらまず牛を見学です。大きな体に大きな目。私を見るなり、駆け足で寄ってきたかと思うと口からピンク色の舌がニューと伸びてきて私の頬をペロッとなめたのです。ザラザラとした温かい舌。私は癒しを感じ、急にホットしました。まるで、私が落ち込んでいることを知っていて慰めてくれるようだったのです。見学した後のアイスも格別に美味しかったです。それはスーパーに並んでいるアイスとは違って、ちゃんと牛乳の味がするものでした。そしてこの瞬間、私は「もっと勉強して牛の事なら何で知っている牧場経営者になる!」と心に決めました。

## —生命あるものを相手にするという事—

そんな経験があって、家から自転車で1時間ほどの所にある広島県立西条農業高等学校畜産科に入学しました。しかし、牛を1回見たことがあるだけで、乳頭数、胃袋の数など何も知らない私が飛び込んだ酪農の世界は、私が思っていたほど甘くはありませんでした。

7つの学科がある学校でしたが、畜産科の実習は他のどの学科よりも早く始まり、夕方はどの学科よりも遅くまであります。生き物を相手にしているわけですから、遅刻や欠席は許されません。はじめのころは気合いも入っていますから、朝もきちんと起きて通っていました。しかし、私は陸上競技部に所属しており、朝練をしてから朝実習に向かっていたので日が経つにつれてだんだんとしんどくなっていたのです。

4時に起きて朝ごはん、お弁当を作り、1時間自転車をこいだらジョギング、それが終われば超特急で牛舎に向かい、時間ぎりぎりまで実習を行い、およそ1キロ離れた校舎に急いで向かうといった感じです。

私は次第にその疲れを家でイライラして家族に八つ当たりすることで発散するようになっていました。もちろん母には怒られましたし、陸上の方もあまりいいタイムは出なくなりました。牛も陸上も自分で決めたことなのに中途半端になっていたのです。

陸上を少し休ませてもらい、自分を見つめなおす機会をいただきました。このとき、はじめて家畜を飼育することがどれほど大変な事か身を持って知ったのです。

## —揺らいだ人生の分岐点—

そんなこんなでときは過ぎ、気が付けば進路を決める時期になっていました。

当初は就職を考えていた私。労働条件や、お給料を見るうちに、いつの間にか牛とは全然関係のない所ばかり希望していました。牛の事について勉強はしてきたものの、自信がなく、資格を持っていなかったため、現実から目を背けていたのです。先生や母とも考え

が一致せず、何度も三者懇談をしました。そして話せば話すほど牛が好きだという気持ちを思い出し、あきらめられない自分に気づいたのです。結局、岡山県にある中国四国酪農大のオープンキャンパスには参加していましたが、そこを受験することになりました。

今振り返ればあのときの選択でよかったとつくづく思います。もしあのとき牛をあきらめていたら、私は今頃後悔していたはずです。

—牛のために、消費者のために—

酪農大に入学して約5ヶ月が経とうとしている今、牛を見る目、生産者意識が変わりました。

先生に言われたことを淡々と行い、機械的な作業をしていた高校時代、目的や理由を気にすることはありませんでした。作業も言われた以上のことをすることはなく、作業が終われば先生の元へ行き、「終わったんですけど次は何をすればいいですか。」と聞くという感じです。

しかし、酪農大に入学して初めての実習のとき、危機感を感じたのです。次に何をすればいいのかわからない自分で考える力を身につけていなかった私は、みんながテキパキ働いている中で焦りを感じました。ただただ作業していた私は牛の調子が悪いことにさえ気づかないどころか、餌をあげることに必死になりすぎて餌を食べていない牛を見逃してしまったのです。

また、低カルシウム血症で起立困難となった牛を無理やり立たそうとしてしまったこともあります。このときはさすがに怒られました。しかし・・・また次の日、同じ様に低カルシウム血症となった別の牛を搾乳の終わりに倒してしまいました。搾る前は異常なく歩いていた牛でしたので、私が牛の動きを制限するためのキーパーを締めすぎたことが原因だと思ってキーパーを外しのですが、なかなか立てず足が震えているのを見て初めて調子が悪いことに気が付いたのです。耳を触ると低カルシウム血症の症状として見られる冷えがあり、体表も冷たく、走った後のように息切れをしていたのです。何とか立ち上がったものの足元はふらついており、牛房に戻る途中、溝にはまって倒れたまま動けなくなってしまいました。前日に同じ症状の牛を見ていたにも関わらず、気が付かなかったのです。このときは自分に対してショックを受けました。2度も同じミスをして、牛を飼育しているものとして恥ずかしく思いました。

この2度の出来事で牛を観察することの重要性が身に染みてわかりました。牛はしゃべることはできませんが、それ以来、牛の異常に気付けるようになりました。今私はノルマとして作業をこなすのではなく、牛のために、餌やりをしたり体調を気にするようになっています。

そしてもう一つ、私の中で生産者意識も変わりました。自分で飼育した牛から搾った牛乳がどこに行っているのか考えもしなかった私。酪農大で自分の意識の低さに驚きました。ただ搾って出荷というわけではなく、乳質には目標値が設定してあり、乳頭の前拭の徹底ぶりに感動しました。ここでの搾乳は、消費者の口に入ることを考えたシステムになっていたのです。

初めは乳質の数値を見てもピン来るものではなく、あまり気にしていませんでした。それでも少しずつ気にするようになったのは、搾った牛乳がバルクタンクに入る前を通るフィ

ルターの汚れ具合を毎日見るようになってからです。前拭を念入りにしたはずなのに、なぜかフィルターにごみ、おがくずがたくさん付いているのです。また、フィルターにブツが付いているときは乳房炎の牛がいるのではないかとハラハラしたものです。

先日まで夏休み当番で搾乳をしていたのですが、毎日毎回フィルターを見るのが楽しみでした。きれいな日は友達と喜び合って、汚かったときは何が原因なのか考えました。フィルターがきれいな日は先生に見せるときも自信を持って見せることができ、汚い日は何を言われるだろうかとドキドキしたものです。

こうしているうちに、きれいで乳質のいい牛乳を消費者に届けたいと思うようになりました。これは牛乳に限らず、食物を生産物として販売している生産者には欠けてはいけない心構えだと思います。生産者であり消費者である私たちは、自分が食べたいと思えるものを生産する義務があるのではないのでしょうか。

—将来私が目指すもの—

酪農をやりたいと思い始めたころはただ漠然と将来は酪農家になるという夢を抱いていました。今私は、あのころの夢より自分が目指す酪農について、より詳しく思い描けるようになっていきます。

放牧と六次産業。それが私の思い描く酪農のキーワードです。酪農家が減少し、TTPの問題を抱えている日本の酪農業界で生き残っていくため、そして消費者の皆さんが直接目で見える形の酪農をしたいと考えています。

本来、牧場で搾乳された牛乳は他の農家さんの牛乳と一緒にメーカーに出荷されるわけですから自分で飼育した牛から搾った牛乳がどのような形で消費者に届いているかわかりません。たとえどんなに自信があっても美味しい牛乳でもその声は生産者には届きません。また、消費者側からしても今飲んでいる牛乳、今食べている乳製品の元になる牛乳を作っている人を知ることはできません。私はそこに疑問を感じ、将来は生産者と消費者が近い環境で働きたいと思うようになりました。

私達牛乳の生産者がどれだけ牛を愛し、美味しい牛乳を作るために牛を飼育しているのか知ってもらうことで、消費者の酪農に対する目は変わると信じています。酪農というすばらしい職業をしていることに誇りを持って働く人になりたいです。

そして、ここで私が忘れてはならないと思うことがあります。それは牛の生命を大切にすることです。経済動物という家畜なのかもしれませんが、牛は生きています。牛の生命があるからこそ牛乳をいただけているのです。

酪農家として生きていく以上、そのことを忘れてはいけません。